

# Musik, Logik, Germanistik

## ——ドイツ語の -ik 外来名詞のアクセントに ついての試論——

三 瓶 慎 一

### 0. はじめに

ドイツ語の初学者が最初に学ぶことの1つに、ドイツ語は「ほぼローマ字どおりに読めば良い」、そして「語のアクセントは第1音節にある」というものがある。前者はほぼ正しい。いくつかのドイツ語特有の読み方のルールがあるとはいえ、その数はさほど多くなく、フランス語や英語などの他の言語に比べれば、ドイツ語の綴りを読めるようになるのに、さほど時間はかからない。それもいたって規則的だから、初めて出会った語でも間違いなく読めるようになる。しかしながら、後者のテーゼには大きな問題がある。

たしかに Hermann Paul (1916) も「ドイツ語の単一語には、ゲルマン語共通として知られる、最強音が第1音節に置かれる、という規則があてはまる」<sup>1)</sup>としているから、こうした記述などを参考にかつての文法教科書が書かれ、その文法教科書を踏襲して、初級の教科書が書かれ続けてきたのだろうし、いまだに書かれ続けているのであろう。

比較的新しい Deutsches Aussprachewörterbuch (2010) でも、ドイツ語由来の語と外来系の語を分けてはいるものの、ドイツ語単一語の場合「大多数の語は(屈折と造語による変化に関係なく)語幹音節にアクセントが置かれる。語幹が2音節からなる場合は、その第1音節にアクセントが置かれる(例: fangen, gefangen, Gefangenschaft, antworten, bearbeitet, versuchen)」<sup>2)</sup>としている。

Duden: Das Aussprachewörterbuch (2023) は「内部に形態論上の境界を持たない大部分の語は、強勢可能な最後の音節にアクセントが置かれる。強勢可能な

のは、音節核 (Silbenkern) に [ə] [ɐ] [ŋ m ] を持たない音節である。ほとんどの場合、これによって語アクセントは、末尾と、末尾の 1 つ前の音節に置かれる」とし、例として

ba'nal, Bal'kon, re'al, Sa'lat, Kon'zert, a'brupt, Pro'let

'Apfel, 'brauchen, 'Mutter, 'heute, 'Sache

Fo'relle, Hor'nisse, Ho'lunder, Wa'cholder

を挙げている。さらに「音節の強勢が可能かどうかを語末から定義するこの方法は、ドイツ語の共時的音韻論の記述において相当程度浸透した。この定義方法は、上掲の例に見られるように、ほとんどが 2 音節から成り、語幹の第 1 音節にアクセントが置かれるドイツ語本来の (heimisch) 語と、末尾音節に強勢が置かれることが多い借用語 (Lehnwörter) との言語史的差異を水平化する (nivellieren) ものである。Forelle のように、形態論的に複合形でない (nicht morphologisch komplex) ドイツ語由来の 3 音節語は非常に少ない」として、ドイツ語由来の語 vs. 外来系の語という対立、あるいは形態論的な前提を取り去っている点で新しい研究を踏まえている。<sup>3)</sup>

初学者は、「語のアクセントは第 1 音節にある」と習った直後に、真っ先に覚えねばならない Appetit, Familie, Gepäck, Information といった語が、このアクセント規則に従っていないことを知る。そして Appétit, Famílije, Informatiún については、教師から「これは外来語だから先刻の規則があてはまらない」と告げられて煙に巻かれる。また Gepäck については、外来語ではないものの、接頭辞の ge- にアクセントがないことは、ずっと後になって知る。

ここで例に挙げたような語彙が、すべてドイツ語の日常的運用に必要な基本重要語であることは論を俟たないであろう。<sup>4)</sup>しかし、それらが本来のドイツ語由来の語であるのか、外来語であるのか、という歴史言語学的な判断は、初学者には不可能である。したがって、「語のアクセントは第 1 音節にある」わけではない例外に次々と遭遇するという、学習途上の悩みを完全に無視していることは、問題だと考えられるのである。

授業で Germanístik, Lógik, Musík<sup>5)</sup>、などの語を知っても、そのアクセントや長音の位置が異なるのに、その規則 (性) を説明されることはまずない。個別に

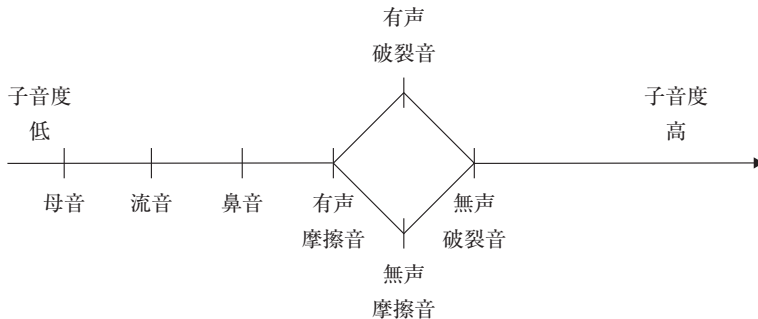
覚えていくしか方法はないのだが、学習者であった経験があれば、誰しも混乱した経験もあるであろう。ドイツ語の専門家が書いたと思われる専門書ないし啓蒙書の位置づけにある書物の中にすら、ときおり\*ゲルマニスティーク、\*グラマティークなどの誤表記が見られさえするのである。<sup>6)</sup>

本論では、ドイツ語のアクセント構造を音節構造と音韻規則の面から必要な限りで概観したうえで、主として外来系の接尾辞 -ik で終わるドイツ語の名詞について、そのアクセント構造の規則性を歴史的に検討する。

### 1. ドイツ語のアクセント構造——音節構造と規則性から

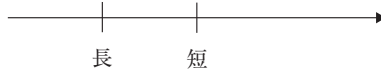
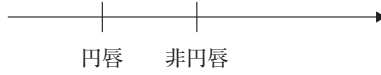
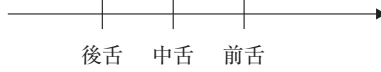
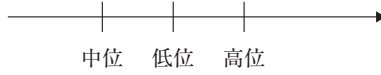
Theo Vennemann によれば、下に挙げたような音素配列論 (Phonotaktik) 上の制約と音韻論上の法則がある。<sup>7)</sup>

それを確認するのに先だって、これ以降、何度も登場する子音度スケール (Skala der Konsonantischen Stärke)<sup>8)</sup>を確認しておこう。



それぞれの音の種類の中での子音度スケール

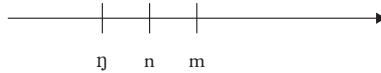
母音



流音



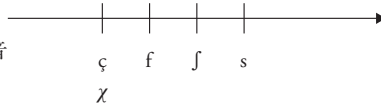
鼻音



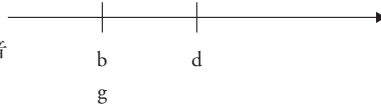
有声摩擦音



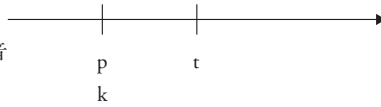
無声摩擦音



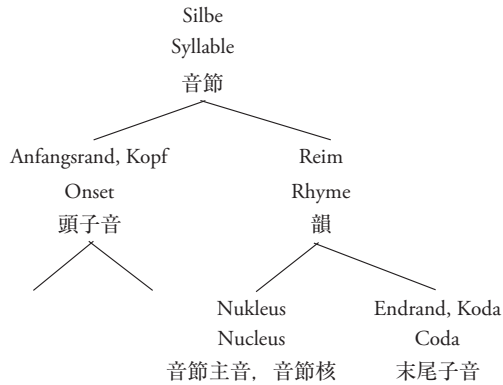
有声破裂音



無声破裂音

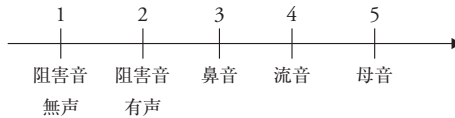


音節の構造と名称は以下のとおりである。<sup>9)</sup>

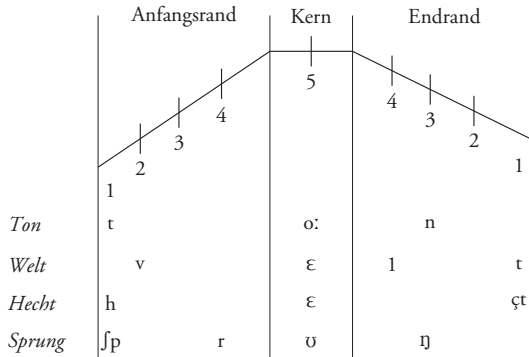


Duden: Grammatik (2016) では、より簡略に「聞こえ度等級 (Sonoritätsklassen)」を次のように規定し、可能な音節構造を下のように図示している。<sup>10)</sup>子音度による Vennemann の方式とは数値の大小が逆になる。

聞こえ度等級



## 聞こえ度による音節のプロファイル



- (1) Anfangsrandの子音群では子音度 (Konsonantische Stärke) が減少 (Duden 式では聞こえ度が增大) し (例: tr- は可, しかし rt- は不可), Endrandの子音群では子音度が增大 (Duden 式では聞こえ度が減少) する (例: -rt は可, しかし -tr は不可)。<sup>11)</sup>

優先される Anfangsrand のあり方は, (a) 言語音の個数が 1 に近ければ近いほど良く, (b) 1 番目の言語音の子音度が高ければ高いほど良く, (c) 1 番目の言語音の子音度が Nukleus の子音度に向かって急激に落下すればするほど良い, とされる (Anfangsrandgesetz)。<sup>12)</sup>

優先される Endrand のあり方は, (a) 含まれる言語音の個数が少なければ少ないほど良く, (b) 最後の言語音の子音度が低ければ低いほど良く, (c) 最後の言語音の子音度が, 先行する Nukleus に対して急激に落下すればするほど良い, とされる (Endrandgesetz)。<sup>13)</sup>

また Nukleus は, その子音度が低ければ低いほど良い, とされる (Nukleusgesetz)。<sup>14)</sup>

- (2) 一般に音節境界 (Silbengrenze) は, 母音間の子音群で, 最強度の子音の直前またはその中にある。<sup>15)</sup>

例: Er.le, Mar.ta; Em.ma, Mat.te (. は音節境界を表す。後者 2 つでの子音は音節跨境的 [ambisyllabisch] であり, 子音が結節 [Gelenk] として機能する。)

- (3) Endrandの子音群で阻害音 (Obstruent) は無声音となる。いわゆる「末尾音硬化 (Auslautverhärtung)」である。<sup>16)</sup>

例：Lie.be/Lieb.ling, ja.gen/Jagd

- (4) 3音節原則 (Dreisilben-Regel)

単一語では、末尾の3音節 (語末から順に Ultima, Pänultima, Antepänultima) のいずれかにアクセントが置かれる。すなわち、末尾から第4番目以前の音節にアクセントが置かれることはない。<sup>17)</sup>

例：(Ultima アクセント) Al.pha.bét, Bü.ró, Ca.fé  
 (Pänultima アクセント) Eu.ró.pa, Káf.fec, Ne.bu.kad.né.zar  
 (Antepänultima アクセント) Já.gu.ar, Je.rú.sa.lem, Pín.gu.in

- (5) 完全音節原則 (Vollsilbenregel)

母音 /a/, /e/, /i/, /o/, /u/, /ä/, /ö/, /ü/, /ai/, /au/, /oi/, /ui/ を含む音節を「完全音節 (Vollsilbe)」という。それ以外を「弱化音節 (reduzierte Silbe)」という。完全音節のみがアクセントを担いうる。<sup>18)</sup>

弱化音節の例：

lau.tet ['lau.tət], Mün.ze ['mʏn.t͡sə] のようにアクセントのない中舌母音 [ə] を含む音節

Fen.ster ['fɛn.stɐ], Va.ter ['fa:tɐ] のように語末にアクセントのない母音化した -er を含む音節

Kegel ['ke:gəl], Atem ['a:təm], Wagen ['va:gən] のように音節形成子音 (silbischer Konsonant) を含む音節

- (6) 柔 (切断) 音節は閉音節である。

母音を延ばすことが不可能な音節を「鋭 [切断] 音節 (scharf geschnittene Silbe)」, それ以外を「柔 [切断] 音節 (sanft geschnittene Silbe)」という。

例：Lot.to / Mit.te (Lot. / Mit. は鋭 [切断] 音節) ; To.to / Mie.te (To. / Mie. は柔

[切断] 音節)

表現を変えれば, Endrand が空 (leer) である音節は「開音節 (offene Silbe)」, それ以外の音節は「閉音節 (geschlossene Silbe)」である。開音節は音節核 (Nukleus) の母音で終わり, それに続く音はない。閉音節は 1 個または複数の音で終わる。<sup>19)</sup>

例: Bö, da, früh, See, sie, so, zu, zäh (開音節)

Ball, Mal, Mohn; Herbst, Mond, Wald (子音により閉じられた閉音節: 複数子音により閉じられた閉音節)

Bau, Mai, neu (二重母音により閉じられた閉音節)

faul, Faust, feist, Freund, neun, Wein (二重母音と [複数] 子音により閉じられた閉音節)

(7) 「重い」 Pänultima よりも前に, アクセントは置かれない。

(二重母音か子音, または音節跨境的 [ambisyllabisch] に) 閉じられた音節は「重い」, またそれ以外は「軽い」。特にすべての弱化音節は「超軽量」音節である。

例: Ká.na.da

A.mé.ri.ka

Je.rú.sa.lem

(アクセント音節は「軽い」)

Su.léi.ka しかし \*Sú.lei.ka

Ve.rán.da しかし \*Vé.ran.da

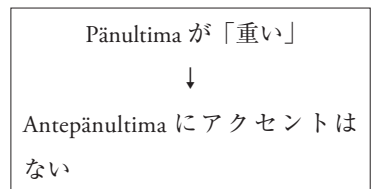
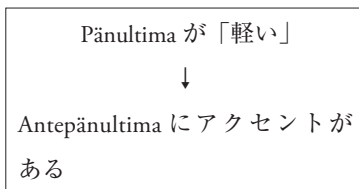
Pet.rár.ca しかし \*Pét.rar.ca

Mo.dés.to しかし \*Mó.des.to

Sa.rás.tro しかし \*Sá.ras.tro

Kat.mán.du しかし \*Kát.man.du

(アクセント音節は「重い」)



例えば Sumatra は Pänultima アクセントの Su.má.tra の他に, Antepänultima



アクセントの *Sú.ma.tra* も許容されている。しかし *Antepänultima* アクセントのみが許容される *Kó.li.bri* も、この規則に従えば、本来は *Pänultima* アクセントの \**Ko.li.bri* も可能なはずである。同様に *Pänultima* アクセントのみが許容される *Ro.bér.ta* や *Vi.tér.bo* と比べてみると、その差が明確になる。

*Ro.bér.ta*, *Vi.tér.bo* では *Pänultima* が閉音節で「重い」のに対し、*Sú.ma.tra*, *Kó.li.bri* では *Pänultima* が開音節で「軽い」ので、原則に従うなら *Antepänultima* アクセントが適切ということになる。*An.dór.ra*, *A.ra.bél.la*, *Ca.na.lét.to*, *Ken.túc.ky*, *Mis.sis.síp.pi*, *O.dés.sa* なども、上記の理由から *Antepänultima* は許容されない。<sup>20)</sup>

(8) いわゆるミュンヘン原則 (Münchener Regel)

*Pänultima* が完全音節で、*Ultima* が弱化している場合、*Antepänultima* にはアクセントが置かれぬ。<sup>21)</sup>

例： *To.má.te* しかし \**Tó.ma.te*

*Ma.rí.ne* しかし \**Má.ri.ne*

*Mar.ga.rí.ne* しかし \**Mar.gá.ri.ne*

この現象は外来語がドイツ語化する過程でよく見られる。

*Hé.le.na* > *He.lé.ne*

*A.ná.ly.sis* > *A.na.lý.se*

*Á.ga.thon* > *A.gá.the*

外来名詞が複数形になる際に起こるアクセントの移動も、この法則による。<sup>22)</sup>

*Dók.tor* > *Dok.tó.ren* (\**Dók.to.ren*)

*Proféssor* > *Pro.fes.só.ren* (\**Pro.fés.so.ren*)

(9) 母音連続の原則 (Hiat-Regel)

母音連続 (Hiat) の前側の音節が高位母音 (/i/, /u/, /ü/) である場合、アクセントは置かれぬ (例外もある)。<sup>23)</sup>

例： *Pi.á.no*, *Lo.ri.ót*, *I.di.ót*, *A.ri.óst*, *O.ri.ó.lo*

Já.gu.ar, Já.nu.ar, Fé.bru.ar

Ém.bry.o

(10) アリアの原則 (Arien-Regel) [母音連続の原則の特殊形態]

前側音節に高位母音があり, 後側音節が弱化している母音連続にはアクセントが置かれなため, Antepänultima にアクセントが置かれる。<sup>24)</sup>

例: Á.ri.e, Be.gó.ni.e, Fa.mí.li.e, Kas.tá.ni.e., Stá.tu.e

(11) 軽い Ultima の原則 (Leichte-Ultima-Regel)

「軽い」Ultima を持つ単一語では Ultima にアクセントが置かれな。<sup>25)</sup>

例: lí.la, Kí.lo, Kí.no, Bi.kí.ni, Ká.na.da, Kó.li.bri, An.dró.me.da

ただし例外として: Ma.ríe, I.dée, Soi.rée, Filét など

(12) 「重い」Ultima の原則 (Schwere-Ultima-Regel)

「重い」Ultima, 特に「超重量の」Ultima よりも前にはアクセントが置かれな。<sup>26)</sup>

「重い」Ultima の例: **-t** (Spa.gát, Komét, Ath.lét など), **-tt** (Ra.bátt, Ka.bi.nétt, ka.pútt など), **-k** (As.pík, re.zi.prók など), **-ck** (Ta.bák, As.pík, Ba.róck など), **-p; -pp** (Ä.sóp; Galópp など), **-z; -tz** (Tra.péz; Ra.bátz など), **-s; -ss** (Pa.ra.díes, Kolóß), **-f; -ff** (Taríf; Kabúff など), **-ch** (Eu.núch など), **-m; -mm** (A.mal.gám; Pro.grámm), **-n; -nn** (Va.ti.kán, Tai.fún; Ty.ránn など), **-l; -ll** (Urál, Kro.ko.díl; Man.dríll, Ka.rus.sél など), **-r; -rr** (Ba.sár, obs.kúr; bi.zárr, Ka.tárrh など), **-V** (La.kái, Schal.méi, Sa.mu.rái, tan.da.ra.déi, Ra.dáu, ahói など)

「超重量の」Ultima の例: **-pt** (A.dépt, ab.rúpt, Kor.rúpt など), **-kt** (Ka.ta.rákt, di.rékt), **-st** (Pa.lást, ro.búst など), **-nt** (Tra.bánt, Gi.gánt, E.le.fánt, Pro.zént, Ho.ri.zónt, pi.kánt など), **-nd** (Va.ga.búnd, mo.ri.búnd など), **-lt** (As.phált, Tu.múlt, a.dúlt など), **-rt** (a.párt, Gal.lért, alért など), **-sk** (gro.résk, O.be.lísk など), **-lk** (Ka.ta.fálk など), **-rk** (au.tárk など), **-mp** (O.lýmp など), **-rp** (E.pi.kárp など), **-nz** (Pro.vínz など), **-rz** (Pro.pórz など), **-ns** (im.méns など), **-rm** (A.lárm など), **-rn** (mo.dérn など), **-rsk** (No.vo.si.bírsk)

例外として：Thá.rau, Áa.ron; Bál.last, Kí.osk, Pó.panz; Gál.lert; Ás.phalt

(13) トランポリンの原則 (Trampolin-Regel)

Ultima が「重く」、Pänultima が「軽い」場合、アクセントは Antepänultima に置かれる。(この法則は、単純に「重い」Ultima に限定した方が良いだろう。なぜなら二重に閉じられた Ultima は規則的にアクセントを帯びるからである。)<sup>27)</sup>

柔 [切断] の (長音化可能な) Ultima の例：Schár.la.tän, Drá.go.män<sup>28)</sup>, Már.zi.pän, Bál.da.chin, Á.la.din, Ál.ko.höl, Ró.ma.dür<sup>29)</sup>, Dé.fi.zit

鋭 [切断] の (長音化不可能な) Ultima の例：Á.no.rak, Ál.ba.tros, Ál.ma.nach, Bá.ri.ton, Á.na.nas

Pänultima が弱化している例：Á.de.bar, Kár.ne.val, , Bú.me.rang

アクセントが当初 Ultima にあり、それから軽い Pänultima を飛び越して Antepänultima に置かれる、あるいはその逆戻りなど、まさにトランポリンのように往き来することからこの名が付いた。<sup>30)</sup>

例：Tram.po.lín      Trám.po.lin  
      Dro.me.dár      Dró.me.där  
      Ma.jo.rán        Má.jo.rän

(14) 以上の原則が該当しない場合は、Pänultima にアクセントが置かれるのがデフォルトである。<sup>31)</sup>

Vennemann (2010) は、古高ドイツ語では語頭アクセント (Initialakzent), 第 1 音節アクセント (Erstsilbenakzent) がふつうであったものの、すでに中高ドイツ語では、末尾アクセント (Finalakzent) が浸透し始めていたという。そして、現代ドイツ語標準語のアクセントは、3 音節原則と音節の「重さ」を加味した末尾アクセントであるとする。<sup>32)</sup>

それを証明する好例として日本語から流入した外来語を挙げる：

To.yó.ta, Su.zú.ki, Ka.wa.sá.ki, Mi.tsu.bí.schi (Pänultima-Default)

Tó.kyo [tó.ki.o] (Hiat-Regel)

さらにまったく外来のものではなく、ドイツ語内部で生成された略語 (Akronym) の例も挙げて、説得力を増している：

ÚNO [Pänultima-Default]

UNÉSCO, Degússa (Deutsche Gold- und Silber-Scheideanstalt)

[Pänultima- Default]

ÚNICEF [Trampolin-Regel]

ドイツ語の歴史の流れの中で、無数のギリシャ・ラテン語、またロマンス語由来の借用語彙が流入した結果、アクセントの観点だけで言えば、ドイツ語もロマンス語の 1 つになったと結論づけるのである。<sup>33)</sup>

音節と音節の連続 (Silbenfolge) で優先されるあり方は、第 2 の言語音と第 1 の言語音の子音度の差が大きければ大きいほど良く (Silbenkontaktgesetz), 語中の Anfangsrand と、言語体系上、語中で可能な Anfangsrand との差が小さければ小さいほど良く (Initialgesetz), 語中の Endrand と、語末で可能な Endrand との差が小さければ小さいほど良く (Finalgesetz), またアクセントが置かれる音節で優先されるあり方は、その重点がより 2 モーラに近い (短母音 + 子音または長母音 [= 短母音 + 短母音]) こと (最適なアクセント音節は 2 モーラ) である (Prokoschgesetz)。<sup>34)</sup>

## 2. -ik 名詞の 3 分類

上で見たドイツ語のアクセント構造の規則を参照しながら、-ik 名詞の分類を試みてみよう。

ドイツ語の -ik で終わる名詞 (基本的に女性名詞) を整理すると次の 3 類型に分類できる。<sup>35)</sup>

以下では、次の記号群を用いて表記する。

V : 母音, C : 子音, . : 音節境界, ´ : アクセント, ¨ : 長音, ` : 短音

## Typ A

・ ...<sup>´</sup>VC.C<sup>´</sup>ik (主アクセントは Pänultima)

á.tk (offene Silbe, gespannt, kurz)	Epigrammatik (Epigrammátik もあり), Grammatik
áy.lk (Diphthong, schwere Silbe)	Hydraulik
áy.tk (Diphthong, schwere Silbe)	Nautik, Kosmonautik
áy.s.tk (Diphthong, schwere Silbe)	Diakaustik
ç.nk	Technik
ó.l.tk (Diphthong, schwere Silbe)	Choreutik, Hermeneutik, Mäeutik, Pharmazeutik, Propädeutik, Therapeutik, Toreutik
k.sik	Lexik
k.tk	Apodiktik, Chiropraktik, Dialektik, Didaktik, Hektik, Kontrapunktik, Praktik, Syntaktik, Taktik,
k.trík	Elektrik
l.dik	Heraldik
l.lk (Gelenk)	Idyllik
l.tk	Peristaltik
m.nik	Hymnik
n.dik	Indik
n.tk	Anakreontik, Mantik, Ornamentik, Paramentik, Romantik, Semantik
p.pík (Gelenk)	Doppik
p.tk	Apokalyptik, Aseptik, Ekliptik, Gemmoglyptik, Gyptik, Haptik, Optik, Orthoptik, Synoptik
p.trík	Dioptrik, Katoptrik
r.fik	Orphik

r.gik	Liturgik
r.mik	Geothermik, Termik
s.mik	Seismik
s.stk (Gelenk)	Klassik
s.ttk	Akustik, Alpinistik, Amerikanistik, Anglistik, Anglizistik, Aphoristik, Aquaristik, Äquilibriumistik, Arabistik, Artistik, Atomistik, Ballistik, Baltistik, Belletristik, Blumistik, Charakteristik, Chronistik, Cineastik, Diagnostik, Diakaustik (Diphthong), Drastik, Elastik, Enkaustik (Diphthong), Enkomiastik, Equilibriumistik, Eristik, Faunistik, Floristik, Futuristik, Germanistik, Gestik (Typ B: Géstik もあり), Gnostik, Gymnastik, Hebraistik, Hellenistik, Heuristik, Hispanistik, Hungaristik, Indianistik, Indoeuropäistik, Indogermanistik, Iranistik, Jiddistik, Journalistik, Judaistik, Kabbalistik, Kameralistik, Kanonistik, Kasuistik, Kaukasistik, Kaustik (Diphthong), Komparatistik, Komparativistik, Kreolistik, Kriminalistik, Kulturistik, Linguistik, Lithurgik, Liturgik, Logistik, Mediävistik, Mongolistik, Mystik, Novellistik, Onomastik, Orchestik, Orientalistik, Patristik, Phantastik, Plastik, Polonistik, Prognostik, Publizistik, Rabulistik, Realistik, Romanistik, Scholastik, Semitistik, Slawistik, Sophistik, Sorabistik, Sphragistik, Statistik, Stilistik, Stochastik, Toponomastik, Touristik, Urbanistik
t.mik	Rhythmik
t.rtk	Egozentrik, Elektrik, Equestik, Exzentrik

## その他

n.ttk	Atlantik (地名；男性名詞)
s.pik	Aspik (男性名詞；Aspík もあり)

## Typ B

・...**Ů.Cĭk** が原則 (アクセントは Pänultima)

á.dik	Dodekadik, Dyadik
á.fik	Epigraphik, Graphik
á.gik	Tragik

á.ík (Ť.ík)	Archaik, Photovoltaik
á.lík	Theatralik
á.mík	Dynamik, Keramik
á.ník	Botanik, Gregorianik, Mechanik, Organik, Panik (オーストリア : Paník), Romanik
á.tík	Aerobatik, Akrobatik, Automatik, Aviatik, Axiomatik, Bromatik, Chromatik, Dalmatik, Diplomantik, Dogmatik, Dramatik, Ekstatik, Emblemantik, Epigrammatik (Epigrammátik もあり), Erotematik, Glossemantik, Idiomantik, Informatik, Kinematik, Lexematik, Melismatik, Melodramatik, Morphematik, Noematik, Numismatik, Phonematik, Pneumatik, Problematik, Sokratik, Statik, Symptomatik, Systematik; Graphematik, Pragmatik (オーストリア : Pragmátik), Thematik (オーストリア : Themátik)
á.trík (Ť.C.Āík)	Hippiatrik, Iatrik, Ophtalmiatrik
áŵ.lík	Hydraulik
á.ík (Ť.ík)	Europäik
é.mík	Phonemik, Polemik; Graphemik
é.ník	Arsenik, Eugenik, Galenik, Irenik
é.pík	Epik
é.rík	Esoterik, Numerik, Obsterik
é.sík	Kinesik
é.tík	Apologetik, Arithmetik (Typ C: Arithmetík もあり), Asketik, Ästhetik, Aszetik, Athletik, Diätetik, Eidetik, Energetik, Ethik, Exegetik, Genetik, Hermetik, Homiletik, Kinetik, Kosmetik, Kybernetik, Kynegetik, Magnetik, Noetik, Phonetik, Poetik, Prothetik, Synthetik, Zynegetik
é.trík (Ť.CĀík)	Biometrik, Isometrik, Metrik, Obstetrik
és.tík (Ť.C.Āík)	Gestik (Typ A: Géstik もあり)
í.bík	Karibik (地名)
í.fík	Spezifik
í.mík	Mimik, Synonymik
í.ník	Klinik
í.rík	Spagirik
í.vík	Motivik

ó.bík	Aerobik
ó.dík	Melodik, Methodik, Periodik, Prosodik, Rhapsodik
ó.gík	Agogik, Alogik, Andragogik, Isagogik, Logik, Pädagogik, Psychagogik
ó.ík (Ů.ík)	Heroik
ó.lík	Diabolik, Symbolik; Kolik (Kolík, Kolík もあり)
ó.mík	Ergonomik, Komik, Ökonomik, Physiognomik,
ó.ník	Bionik, Chronik, Diatonik, Elektronik, Enharmonik, Geotektonik, Harmonik, Hedonik, Hydroponik, Kanonik, Lakonik, Mnemonik, Moletronik, Optronik, Pentatonik, Phonik, Pneumonik, Sinfonik, Symphonik, Tektonik
ó.pík	Topik
ó.rík	Aleatorik, Allegorik, Anaphorik, Deklamatorik, Historik, Kalorik, Kataphorik, Kombinatorik, Metaphorik, Motorik, Rhetorik; Sensomotorik, Sensusmotorik
ó.tík	Anekdotik, Erotik, Exotik, Gotik, Hypnotik, Semeiotik, Semiotik
ú.ník	Lunik
ý.fík	Glyphik
ý.mík	Paronymik, Toponymik
ý.pík	Typik
ý.rík	Lyrik
ý.tík	Analytik

## その他

á.dík	Ladik (男性名詞)
í.fík	Pazifik (地名; 男性名詞, 英語由来のため Pázifik もあり)
ó.lík	Katholik (男性名詞; 1700 年頃 < 16 世紀 < kirchenlat. <i>catholicus</i> ; Katholík もあり; オーストリア: Katholík)
úts.ník	Kibbuznik (男性名詞)

## Typ C

・...Ů(C).Čík が原則 (アクセントは Ultima; オーストリアなどでは...Ů(C).Čík もあ



り)

a.ík (V.ík)	Mosaik (Mosaík もあり)
a.tík	Mathematik (Mathematík もあり) <sup>36)</sup>
b.lík	publik (形容詞；publík もあり), Republik (Republík もあり)
b.rík	Fabrik, <sup>37)</sup> Rubrik (オーストリア：Rubrík)
i.fík	magnífik (形容詞)
i.tík	Kritik (Kriťík もあり), Politik (Politík もあり)
o.lík	Kolik (Kólik もあり；オーストリア：Kolík)
p.lík	Duplik, Repulik, Triplik (Triplík もあり)
p.plík (Gelenk)	Supplik
s.pík	Aspik
u.bík	Kubik (Kubík もあり)
u.sík	Musik
y.sík	Physik (Physík もあり)

その他

m.bík	Mosambik (国名)
s.tík	Domestik (男性名詞)
o.lík	Katholik (男性名詞)
s.pík	Aspik (男性名詞, オーストリア中性名詞：Aspík, Áspik もあり)

### 3. -ik 名詞のアクセント構造——音韻論的・歴史的観点から

-ik 名詞は、本来は外国語からの借用語であるが、多くはもはやドイツ語の語彙として定着している。母語話者が日常的に用いる語彙を外来語であると認識するのは、明らかにギリシャ語やラテン語の形式を残した馴染みの薄い学術用語などの場合であろう。したがって、借用語であっても、上に挙げたアクセント構造の諸原則が該当するものと考えられる。

Vollsilben-Regel によって韻律リズム上、強弱格 (Trochäus) と強弱弱格

(Daktylus) が保障される (例: Ták.tik, In.do.ger.ma.nís.tik; Mí.mik, Oph.tal.mi.á.trik — アクセント音節よりも前の音節は、韻律上 Auftakt と考える)。Hiat-Regel と、Arien-Regel によれば、母音連続でより高位の母音にアクセントを置かないため、Europáik, Heróik, Archáik, Photovoltáik は規則に適合しているが、Typ C はこれにあてはまらず、別の根拠を求める必要がある。

Typ C の Musik などに関して、Wurzel は、「-i- はアクセントがない場合は常に短い」とするが、「ただし随意的 (fakultativ)」という条件を付ける。そして /múz/ という語幹と接尾辞 -ik を設定し /múz + ík/ → mú.zík → mù.zík → mù.zík oder mù.zík という図式を挙げている。<sup>38)</sup>

## Typ A

- ・音節構造は ...ŮC.Cík である。
- ・アクセントは末尾から 2 つ目の音節 (Pänultima) にある (Pänultima-Default)。
- ・Pänultima は閉音節 (geschlossene Silbe) であり、二重母音または子音で閉じられ、アクセントを持つ。母音 1 個の場合、その母音は短音である。
- ・Ultima は Anfangsrand に子音があり、Nukleus の母音 -i- は短音である。
- ・ギリシャ語、ラテン語由来の語幹を用い、接尾辞 -ik を加えることにより生産的 (produktiv) である。
- ・名詞 -ismus, -ist, 形容詞 -istisch との共通性がある。
- ・Grammátik の音節構造は ...Ů.Cík であるから、本来は Typ B に属し、Grammátik となるのが本来であろう。DUDEN: Aussprache は Epigrámm から生じた Epigrammatik には Epigrammátik と Epigrammátik 両方を認めている。<sup>39)</sup>
- ・Gestik は Pänultima は閉音節 (geschlossene Silbe) であり、子音で閉じられているため Gés.tik となり、幹母音が短音であるのが本来である。しかし基となる語幹が Gés.te であるため、Gés.tik と長母音にもなる。<sup>40)</sup>
- ・Ultima の Anfangsrand が /tr/ である Iatrik, Ophthalmiatrik に関しては、語根にすでに -tr- の結合が含まれているという語源的・形態論的な問題による。

## Typ B

- ・音節構造は  $\dots\acute{V}.Cik$  が原則である。
- ・アクセントは末尾から2つ目の音節 (Pänultima) にある (Pänultima-Default)。
- ・アクセントを持つ Pänultima の Nukleus が /a/, /e/, /i/, /o/, /u/, /y/ であり<sup>41)</sup>, Endrand が空 (leer) である開音節 (offene Silbe) である。
- ・Pänultima は、開音節であり、Nukleus は緊張母音 (gespannter Vokal) であり、アクセントがあり、よって長母音である。これは一般的な長母音とアクセントの関係に合致する。<sup>42)</sup>
- ・Pänultima が、開音節であり、Nukleus が緊張母音 (gespannter Vokal) であり、アクセントがあるにもかかわらず、短音である Gram.má.tik は例外である。<sup>43)</sup>
- ・Ultima は Anfangsrand に子音があり、Nukleus の母音は短音である。
- ・Ultima の Anfangsrand が /tr/ である Hippiatrik, Iatrik, Ophthalmiatrik に関しては、語根にすでに -tr- の結合が含まれているという語源的・形態論的な問題による。

Hippiatrik < griech. *ἰππιατρικός* はまさにその起源となった形を踏襲している。Iatrik 「医術」は griech. *ιατρική* 「医術」を借用したものであり、さらに Ophthalmiatrik 「眼科学」< griech. *ὀφθαλμός* 「目」+ griech. *ιατρική* 「医術」のように、複合語として医学分野の名称が生まれた。<sup>44)</sup>

Isometrik, Metrik の起源は lat. *[ars] metrica* < griech. *μετρική [τέχνη]* であり、その語根は Metrum < lat. *metrum* < griech. *μέτρον* である。

- ・Lý.rík (19世紀初頭 < frz. *lyrique*), Páník (19世紀中頃 < frz. *panique*), Ro.má.ník (20世紀初頭 < 17世紀 romanisch < lat. *rōmānus*) など、形容詞が先に成立し、名詞の成立がそれに続き、その時期が遅いものは Pänultima-Regel が確立した後に受容されたものと考えられる。
- ・Äs.thé.tik (< 1750年頃 nlat. *Aesthetica*), Pä.da.gó.gik (18世紀 < griech. *παιδαγωγική [τέχνη]* »Erziehungskunst«), Chró.nik (ahd *krōnib*; erneut nhd. *krōnik(e)* < lat. *chronica*) などは、フランス語を経由せず、ギリシャ語、ラテン語から受容されている。
- ・北ドイツでは長い幹母音が、ドイツ語圏南部では時に、オーストリアでは常に短音となり  $\dots\check{V}(C).Cík$  となる (例: 北部 The.má.tik, 南部 The.má.tik)<sup>45)</sup>。

## Typ C

- ・音節構造は …Ů.Cík が原則である。
- ・Pänultima は Nukleus の母音が短音である。
- ・Ultima の Nukleus の母音 -i- は長音であり、アクセントがある。
- ・ただし、別種として、特にオーストリアなどでは…Ů.Cík という音節構造 (Ultima が短音で、かつアクセントを持つ) も見られる。
- ・Wurzel は, Ma.thě.mă.tík, Mů.sík, Rě.půb.lík と Klás.sik, Ló.gik, Pă.da.gó.gik を対比させ, 「-ik の先行音節, ないしさらにそれに先行する音節が〈重い〉場合, つまり, 短母音を持つ開音節が 2 個先行しない場合, -ik にはアクセントを置くことができない」とする。また Gram.mă.tík は 2 つ目の a が緊張母音であるので, Klás.sik に倣って Gram.mát.tík と考えれば, このアクセント位置を説明できるとする。<sup>46)</sup>
- ・16 世紀末に始まるロマンス語系語彙の受容が, 17 世紀の「三十年戦争」を経てのいわゆる「当世風時代 (alamodische Zeit)」にも続き, 激化した。この時代にフランス語から流入した語彙のほぼ半分が現代でも使用されている。<sup>47)</sup>

Typ C は, 古い時代にラテン語からドイツ語へいったん流入した後, この時代になってあらためてフランス語から再受容されたという特殊な経路を経たもの, あるいは 17 世紀になってフランス語から受容されたものなどがある。その結果, アクセントがフランス語式に末尾に置かれたままとなり, さらに末尾が緊張母音 (gespannter Vokal) であることからさらに長音化 (Dehnung) された。例: Aspík (19 世紀後半 < frz. *aspic*)<sup>48)</sup>, Domestík (17 世紀末 < frz. *domestique*)<sup>49)</sup>, Fabřík (14~17 世紀 < lat. *fabrica*; 17 世紀後半 < frz. *fabrique*)<sup>50)</sup>, Kolík (16 世紀 < lat. *colica*; その後 frz. *colique*)<sup>51)</sup>, Kritík (17 世紀末 < frz. *critique*; *musik, physik, mathematik* などと同様 -ik は短音であった)<sup>52)</sup>, Mathematík (15 世紀 < lat. (*ars*) *mathēmatica*)<sup>53)</sup>, Mosaík (18 世紀 < frz. *mosaïque*)<sup>54)</sup>, Musík (9 世紀 ahd. *musica* < lat. (*ars*) *mūsica*, 16~17 世紀まではアクセントは幹母音にあったが, その後, 表記は *Musik* となり frz. *musique* の影響で語末にアクセントが移動した)<sup>55)</sup>, Physík (frühnhhd. *Physic, Phisic* < mhd. *fisike* <

afrz. *fisique* < lat. *physica*)<sup>56)</sup>, *Politík* (17世紀中頃< frz. *politique*, アクセントは語末 [politík] の他, 語幹 [polítik] の場合も)<sup>57)</sup>, *publík* (形容詞; 17世紀< frz. *public*)<sup>58)</sup>, *Republík* (17世紀< frz. *république*; 16世紀 *Respublic(a)*, *Respublick* < lat. *rēs pūblica*)<sup>59)</sup>

#### 4. 結 語

ドイツ語の外来系名詞で -ik に終わるものは、アクセント構造上、大きく次の3種類に分類される。

Typ A ...<sup>́</sup>ŮC.Cík (主アクセントは Pänultima)

Typ B ...<sup>́</sup>Ů.Cík が原則 (アクセントは Pänultima)

Typ C ...<sup>́</sup>Ů(C).Cík が原則

(アクセントは Ultima; オーストリアなどでは…<sup>́</sup>Ů(C).Cík もあり)

ドイツ語化したものについては、おおむね共時的音韻論の原則が該当するが、Typ C については (あらためて) フランス語経由の受容が行われたために、Typ A, Typ B とは違うふるまいをすることになった。

Typ A と Typ B は造語成分としての接尾辞 -ik により、ギリシャ語, ラテン語の語幹を用いて新造語が可能である。そのため、学術用語などで新語が生産されるため、例が多い。一方、Typ C は、これを基に複合語を作るのでない限り、新造語はできない。

Typ C に属する語でも、オーストリアでは -ik が短母音となることで、長音化される以前のフランス語のアクセントの痕跡を留めている。

#### 注

- 1) Hermann Paul: Deutsche Grammatik. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1968. [Unveränderter Nachdruck der 1. Auflage von 1916] Bd. 1, S. 152.
- 2) Eva- Maria Krech / Eberhard Stock / Ursula Hirschfeld / Lutz Christian Anders: Deutsches Aussprachewörterbuch. Berlin / New York: Walter de Gruyter, 2010, S. 46f. ドイツ語単一語には、外来系の接尾辞である -ei, -ieren も含めている。(なお以下で本書の参照箇所を挙げる場合は、単に DAW と表記する。)

- 3) DUDEN: Das Aussprachewörterbuch. 8., komplett überarbeitete und erweiterte Auflage, Berlin: Cornelsen, 2023, S. 61. (なお以下で本書の参照箇所を挙げる場合は、単に DUDEN: Aussprache と表記する。)
- 4) いずれも A1-Wortschatz に含まれる : [https://www.goethe.de/pro/relaunch/prf/de/A1\\_SD1\\_Wortliste\\_02.pdf](https://www.goethe.de/pro/relaunch/prf/de/A1_SD1_Wortliste_02.pdf) ; 2024. 09. 01 閲覧
- 5) A2-Wortschatz に含まれる : [https://www.goethe.de/pro/relaunch/prf/de/Goethe-Zertifikat\\_A2\\_Wortliste.pdf](https://www.goethe.de/pro/relaunch/prf/de/Goethe-Zertifikat_A2_Wortliste.pdf) ; 2024. 09. 01 閲覧
- 6) -ik 名詞のアクセントや母音の長短についての言及は、確認できた限りでは、次の 3 点である :

Wolfgang Ullrich Wurzel: Der Fremdwortakzent im Deutschen. IN: Linguistics. No. 56, The Hague / Paris: Mouton, 1970, pp. 87-108.

「-ik に終わるものは多くその前の音節に第 1 アクセントをおく。しかし -ik におかれるものも若干数えられる。Gram'matik, Mathe'matik od. Mathema'tik, Syst'e'matik. しかし Mu'sik, Phy'sik, Poli'tik である。」(桜井和生『改訂 ドイツ広文典』, 改訂 39 版, 1977 年, 第三書房, 25 頁。母音の長短に関する注記はない。)

„A very large number of foreign words have the accent upon the last or next to the last syllable: **Infini'tiv**, **Initia'tive**, &c. There is a tendency for those accented upon the last syllable to shift it upon the first in accordance with German fashion: '**Infinitiv**, &c.; especially in case of contrast, as in '**Singular** in contrast to '**Plural**, '**Objekt** in contrast to '**Subjekt**, &c. Some, as '**Kompaß**, have become thoroly naturalized and have the accent upon the first syllable. Those in -ik have the accent upon the stem where they are derived directly from the Latin but receive the stress upon the suffix where they have entered the language thru the French: **Ar'senik**, **Bo'tanik**, '**Chronik**, **Gra'mmatik**, '**Metrik**, **Po'etik**, **Rhe'torik**, '**Taktik**, '**Technik**; **Fa'brik**, **Katho'lik**, (but **ka'thologisch**), **Poli'tik**, **Phy'sik**, formerly '**Musik** with Latin accent, now in French form Mu'sik; sometimes with fluctuating stress: Arithme'tik or Arith'metik, Meta'physik or **Metaphy'sik**, **Mathema'tik** or **Mathe'matik**, &c. …“ (George Oliver Curme: A Grammar of the German Language. 2nd revised ed., 11th Printing, Ungar, New York, 1977, p. 46. 母音の長短に関する記号は一貫していないように見受けられる。)

- 7) Theo Vennemann: Die Silbe in Akzent und Rhythmus. IN: Die Silbe im Anfangsunterricht Deutsch: Festschrift zum zehnjährigen Jubiläum des Lehrgangs ABC der Tiere – Silbenmethode mit Silbentrenner, Offenburg: Mildenerger, 2010, S. 85-106.
- 8) Theo Vennemann: Zur Silbenstruktur der deutschen Standardsprache. IN: Silben, Segmente, Akzente, hrsg. von Theo Vennemann, Berlin: Walter de Gruyter, 1982, S. 284.
- 9) Theo Vennemann: Neuere Entwicklungen in der Phonologie. Berlin / New York / Amsterdam: Mouton de Gruyter, 1986, S. 48. Vennemann が Paul Kiparsky を基に作成した

- ものに、筆者がドイツ語と日本語の名称を加えた。
- 10) DUDEN: Die Grammatik. Hrsg. von. Angelika Wöllstein und der Dudenredaktion. 9., vollständig überarbeitete und aktualisierte Auflage, Berlin: Bibliographisches Institut, 2016, Randnummer 28–29.
- 11) Vennemann (2010): a. a. O., S. 85. なお以下に挙げた例では、必要に応じて音節境界と母音の長短も筆者が加えた。
- 12) Vennemann (1986): a. a. O., S. 38.
- 13) Ebd.
- 14) Vennemann (1986): a. a. O., S. 39.
- 15) Ebd.
- 16) Ebd.
- 17) Vennemann (2010): a. a. O., S. 86.
- 18) Vennemann (2010): a. a. O., S. 87.
- 19) Vennemann (2010): a. a. O., S. 88–90.
- 20) Vennemann (2010): a. a. O., S. 91–93.
- 21) Vennemann (2010): a. a. O., S. 93.
- 22) Fréun.din > Fréun.din.nen, A.me.ri.ká.ne.rin > A.me.ri.ká.ne.rin.nen のように形態論的なパラディグマ上の変化ではアクセントが移動しないというのが一般原則だが、それを破る例外である。Vgl. ebd.
- 23) この法則に従って、「(霊長類の) ヒヒ」を Pá.vi.a.n と言うが、同じようにイタリアの地名を Pá.vi.a と読む母語話者も多い。しかし、これが実は Pa.ví.a だということは、教わらなければわからないという。同様にラジオやテレビで耳にする Thá.li.a[-Theater] も同じ理由からのアクセント配置だが、本来、Tha.lí.a であることは、それを知って初めてわかることであるという。Vgl. a. a. O., S. 94.
- 24) Vennemann (2010): a. a. O., S. 94.
- 25) Vennemann (2010): a. a. O., S. 95.
- 26) Ebd.
- 27) Vennemann (2010): a. a. O., S. 96–97.
- 28) DAW では Dra.go.mán (S. 455)
- 29) DUDEN: Aussprache では Ró.ma.dur も (S. 756)
- 30) Vennemann (2010): a. a. O., S. 96–97.
- 31) Vennemann はドイツ語に関しても、語頭アクセント (Initialakzent) を、コントラストを表す特殊な場合、あるいはそのコントラストが常態となった語類に特有のもののみなす。
- 例：言語学の用語としての Nó.mi.na.tiv, Gé.ni.tiv, Dá.tiv, Ák.ku.sa.tiv, Stá.tiv (「静態

- 相, 状態相」, 一般名詞の「三脚」の意では *Sta.tív*)。Vgl. Vennemann (2010): a. a. O., S. 98. 前掲注 6) *Curme* も参照。
- 32) Vennemann (2010): a. a. O., S. 103–105.
- 33) Vennemann (2010): a. a. O., S. 105.
- 34) Vennemann (1986): a. a. O., S. 39.
- 35) 以下に挙げる語例は, Gustav Muthmann: *Rückläufiges deutsches Wörterbuch*. 3., überarb. und erw. Auflage, Tübingen, 2001 をはじめ, 複数の辞書等での蒐集の結果を掲載したもので, 網羅的ではない。また, 現代ドイツ語で生成された複合名詞は含めていない。
- 36) アンケート調査の結果, オーストリアを除く全体で, *Mathematík* を適切だと感じるのは 90%, 不適切だと感じるのは 4%, どちらともいえないのが 6%, *Mathemátik* を適切だと感じるのは 21%, 不適切だと感じるのが 65%, どちらともいえないのが 14% であった。
- オーストリアのみで見ると, *Mathematík* を適切だと感じるのは 71%, 不適切だと感じるのは 12%, どちらともいえないのが 18%, *Mathemátik* を適切だと感じるのは 94%, 不適切だと感じるのが 6%, どちらともいえないのが 0% であった。(DUDEN: *Aussprache*, S. 601.)
- 37) アンケート調査の結果, *Fabřík* を適切だと感じるのは 66%, 不適切だと感じるのは 20%, どちらともいえないのが 14%, *Fabřík* を適切だと感じるのは 58%, 不適切だと感じるのが 28%, どちらともいえないのが 14% であった。(DUDEN: *Aussprache*, S. 371.)
- 38) Wurzel (1970): a. a. O., S. 103, 104, 107. しかしながら, 現代のドイツ語母語話者が, *Musik* < *Muse* と認識するのは困難であると思われる。
- 39) Typ B 参照。
- 40) *Geste* については, DAW は *Géste* のみを認めている (S. 540)。DUDEN: *Aussprache*. は *Géste*, selten: *Gěste* とし (S. 413), アンケート調査の結果, *Géste* を適切だと感じるのは 94%, 不適切だと感じるのは 3%, どちらともいえないのが 3%, *Gěste* を適切だと感じるのは 14%, 不適切だと感じるのが 80%, どちらともいえないのが 6% であった (ebd.)。また *Gestik* については, DAW は *Géстик* od. *Gěстик* とし (S. 540), DUDEN: *Aussprache* は *Gěстик*, selten: *Géстик* としている (S. 413)。
- 41) /ɛ/, /ø/ の出現例は確認できなかった。
- 42) Die Unterscheidung von gespannten und ungespannten Vokalen fällt für das Deutsche weitgehend zusammen mit der von langen und kurzen Vokalen. Ist ein gespannter Vokal betont, so wird er als Langvokal artikuliert, z. B. [o:] in Ofen, [e:] in edel, [u:] in Buche, [i:] in Biene. Ungespannte Vokale sind dagegen auch dann kurz, wenn sie betont sind, z. B. [ɔ] in



- offen, [ɛ] in Henne, [ʊ] in Mutter, [i] in Rinne [...]. Da die gespannten Vokale in Wörtern des Kernwortschatzes meist betont sind, fällt Länge mit Gespanntheit und Kürze mit Ungespanntheit zusammen. (Duden: Grammatik. 9., vollständig überarbeitete u. aktualisierte Auflage, Berlin: Bibliographisches Institut, 2016, Randnummer 17)
- 43) 16世紀には、現在のはもはや標準的ではない Grammatick という異表記もあったことから、明らかに -ick は短音で、ラテン語の *grammatica* のアクセントを踏襲したものと考えられる。(Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch. 9., vollständig neu bearbeitete Auflage von H. Henne, und G. Objartel unter Mitarbeit v. H. Kämper-Jensen, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1992, 367f.)
- 44) Iatrie の形でもドイツ語に借用され、...iatrie で「…医術, 医学」となる (Psychiatrie 「精神医学」, Pädiatrie 「小児医学」など)。griech. ιατρός 「医師」からは Psychiater 「精神科医」, Pädiater 「小児科医」などが生まれた。
- 45) Ulrich Ammon u. a.: Variantenwörterbuch des Deutschen. Berlin / New York: Walter de Gruyter, 2004, S. LV.
- 46) Wurzel: a. a. O., S. 97.
- 47) Alfred Schirmer: Deutsche Wortkunde. 6. verbesserte u. erweiterte Auflage v. Walther Mitzka, Berlin: Walter de Gruyter, 1969, S. 100–102.
- 48) Etymologisches Wörterbuch des Deutschen. Erarbeitet v. einem Autorenkollektiv des Zentralinstituts für Sprachwissenschaft unter der Leitung von Wolfgang Pfeifer., Berlin: Akademie-Verlag, 1989, Bd. 1, S. 82. (なお以下で本書の参照箇所を挙げる場合は、単に EWD と表記する。)
- 49) EWD: Bd. 1, S. 298.
- 50) DUDEN: Das Herkunftswörterbuch. 6., vollständig überarbeitete und erweiterte Auflage, Berlin: Bibliographisches Institut, 2020, S. 249. (なお以下で本書の参照箇所を挙げる場合は、単に DUDEN: Herkunft と表記する。); EWD: Bd. 1, S. 397; Jacob und Wilhelm Grimm: Deutsches Wörterbuch. Bd. 3, vollendet 1862, Nachdr. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984, Sp. 1217. (なお以下で本書の参照箇所を挙げる場合は、単に GRIMM と表記する。)
- 51) DUDEN: Herkunft, S. 453; GRIMM: Bd. 11, vollendet 1873. Sp. 1612; EWD: Bd. 2, S. 811.
- 52) DUDEN: Herkunft, S. 479; GRIMM: Bd. 11, vollendet 1873. Sp. 2334–2336; EWD: Bd. 2, S. 935.
- 53) DUDEN: Herkunft, S. 539; EWD: Bd. 2, S. 1074.
- 54) DUDEN: Herkunft, S. 565; EWD: Bd. 2, S. 1128f.
- 55) DUDEN: Herkunft, S. 570; GRIMM: Bd. 12, vollendet 1885, Sp. 2740f; EWD: Bd. 2,

- S. 1141.
- 56) DUDEN: Herkunft, S. 627; GRIMM: Bd. 13, vollendet 1889, Sp. 1835; EWD: Bd. 2, S. 1273.
- 57) DUDEN: Herkunft, S. 638; GRIMM: Bd. 13, vollendet 1889, Sp. 1979; EWD: Bd. 2, S. 296.
- 58) DUDEN: Herkunft, S. 656; GRIMM: Bd. 13, vollendet 1889, Sp. 2201; EWD: Bd. 2, S. 1337.
- 59) DUDEN: Herkunft, S. 689; GRIMM: Bd. 14, vollendet 1893, Sp. 817–18; EWD: Bd. 3, S. 1414f.

[付記] 本稿執筆の契機となったのは、筆者担当のドイツ語インテンシブコース上級で学んでいた<sup>そめや けな</sup>染矢奈樹君（現 慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程前期在学中）からの「-ik で終わる名詞のアクセントや母音の長短に規則性はないのですか」という質問であった。本文で引用した Curme の当該記述部分のコピーを渡して質問に答えたものの、もう少し精密に検討してみたいと思ったためである。丁寧に学び、自ら問題を発見できる優秀な学生諸君とともに学ぶことができた喜びを、あらためて噛みしめている。